

目次

古代の貨幣

無文銀銭	1
富本銭	2
皇朝十二銭	4

中世の貨幣

(1) 中国銭の普及	32
(2) 鎌倉幕府と貨幣	35
(3) 建武の中興と貨幣	36
(4) 私鑄銭の登場	36
(5) 明朝銭の渡来	37
(6) 銅貨の混乱	38
(7) 石見銀山の発見	40
(8) 甲州金	41
(9) 加賀の貨幣	42
(10) 戦国大名と金銀	42

江戸時代初期の貨幣

(1) 初期の慶長金	48
(2) 慶長金銀の制定	51
(3) 慶長銀の誕生	55
(4) 慶長銀	56

江戸時代の領国貨幣

(1) 毛利氏の判銀	61
(2) 甲州金	62
(3) 加能越の銀貨	65
(4) 諸国灰吹銀寄	66

江戸時代の銅銭

(1) 江戸時代初期の銅銭	69
(2) 古寛永銭	73
(3) 長崎貿易銭	76
(4) 新寛永銭	76
(5) 紙幣の登場	78

改鑄の時代—動揺する貨幣

(1) 元禄の改鑄	81
(2) 宝永期の貨幣	84
(3) 正徳・享保の貨幣	88

(4) 正徳期の銅銭 91 貨幣制度の再建—新しいバランス

(1) 元文の改鑄	95
(2) 明和期の貨幣	99
(3) 文政期の貨幣	103
(4) 天保期の貨幣	106
(5) 嘉永期の貨幣	111
(6) 安政期の貨幣	114
(7) 万延・文久期の改鑄	121
(8) 幕府紙幣	125
(9) 幕末～明治初頭の地方貨	126
(10) 天保通寶	134

明治初期の貨幣 139

洋式の貨幣（不換紙幣の時代） 147

洋式のコイン（新貨条例の制定） 152

円銀の時代

日本銀行券（兌換銀行券）の発行 ... 159

金本位制への挑戦 162

第1次大戦と通貨（高額紙幣の強化と銀貨の軽量化と卑金属化） 169

昭和の貨幣（金本位制への復帰失敗から戦時貨幣へ） 172

戦後の貨幣

(I) 急激なインフレ期の貨幣 （昭和20年～24年）	179
(II) 国際社会への復帰と貨幣 （昭和24年～31年）	185
(III) 高度成長期の貨幣 （昭和30年～39年）	190
(IV) 記念貨の時代始まる （昭和39年～）	193
(V) ハイテク時代の紙幣 （昭和59年～）	197
(VI) 令和の新紙幣	200

近代貨幣の手変り 202

この手引書をお読みになる皆様へ

※本書中、JNDA-とあるのは『日本貨幣カタログ』に掲載の貨幣を指しています。日本貨幣商協同組合は毎年、『日本貨幣カタログ』を編纂、発行しております。同カタログと併せてお読みいただくと、より一層理解しやすいと思います。

※本書に掲載の写真は特別なことわりのない限り、硬貨は原寸、紙幣は1/2に縮尺してあります。

(VI) 令和の新紙幣

平成31年(2019)4月、財務省は2024年上期をめぐりに1万円、5000円、1000円紙幣の新紙幣を発行すると発表しました。

紙幣に採用される肖像は1万円券が^{しよさわ}渋沢栄一(1840～1931)、5000円券は^{つだうめこ}津田梅子(1864～1924)、1000円券は^{きたざとしぼざぶろう}北里柴三郎(1853～1931)です(写真47～49)。

発表によると、これらの紙幣には新たな偽造防止対策が採用されます。

- 新たに高精密なすき入れ(白黒すかし)を導入
- 1万円券、5000円券には肖像の3D画像が回転するストライプのホログラムを採用
- 1000円券は肖像入りのパッチタイプのホログラムを採用
- 記番号は最大10桁へ変更(アルファベット2桁・数字6桁・アルファベット2桁)

またユニバーサルデザイン(障害の有無・年齢などにかかわらず多くの人々が利用しやすいデザイン)実現のため、券種間の識別性向上が図られます。

- 指の感触によって識別できるマークの形状および券種ごとの配置変更
- 額面数字の大型化
- ホログラム、すき入れ位置の券種ごとの変更

○渋沢栄一・津田梅子・北里柴三郎の略歴

[渋沢栄一] 天保11年(1840)、埼玉県深谷市生まれ。近代資本主義の生みの親と言われています。若くして一橋慶喜に仕え、27歳の時慶喜の実弟徳川昭武に随行し、パリ万国博覧会ほか欧州各国を見聞しました。明治維新後大蔵省で井上馨のもと貨幣・金融・財政制度の制定に携わりました。明治6年(1873)に退官後、国立第一銀行、東京商法会議所、東京銀行集会所、東京手形交換所などの創立、さらに各種企業の設立にも尽力しました。民間の銀行や企業など生涯設立に係わった企業は500以上に上ります。大正4年(1915)、第一線を退いてからは教育・文化事業に力を注ぎ、昭和6年(1931)、92歳で生涯を閉じました。



写真47 新1万円券(渋沢栄一)のイメージ

近代貨幣の手変り

(1) 近代金貨の手変り

近代金貨の手変り研究は、金貨そのもの
の高額さと現存数の少なさにより、銀貨に
くらべると未だ発展途上といえます。しか
し、近年、2005年から2008年まで行われ
た財務省の金貨放出により、3万枚余の金
貨が市場に出回ることになり、比較、研究
が進むようになりました。そのため、新た
な発見が今後見つかり、発表されるかもし
れません。その意味では今後大いに期待で
きる分野といえるでしょう。

下記にこれまでに発表された関係文献の
一部をご紹介します。今後の研究の参考
にしていいただければ幸いです。

【旧 20 円金貨】

・『収集』書信館出版（株）、1998（第 23 卷
第 10 号）、13～14 頁

【旧 10 円金貨】

・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 卷
第 3 号）、18～24 頁

【旧 5 円金貨】

・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 卷
第 7 号）、23～35 頁

・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 卷
第 9 号）、17～28 頁

・『収集』書信館出版（株）、2009（第 34 卷
第 5 号）、9～16 頁

【旧 2 円金貨】

・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 卷
第 11 号）、10～21 頁

【旧 1 円金貨】

・『収集』書信館出版（株）、2010（第 35 卷
第 5 号）、33～46 頁

【金貨全般】

・『日本金貨原色図鑑』太田保編、万国貨幣
洋行 1980 年

・『近代金貨オークションカタログ』財務省、
2005～2008

(2) 近代銀貨・銅貨の手変り

A. 1 円銀貨（円銀）



図1 正貝円 図2 普通円 図3 増正貝

(イ) 1 円銀貨 明治 3 年銘

竜面の極印は 1 タイプで
す。ただし、使用時に起きた
磨損と補修により部分的
な変更がいろいろ見られま
す。



図4 欠貝円



図5 半欠貝

「円」字の変化は「正貝円」
（図 1）、「普通円」（図 2）、「増
正貝円」（図 3）、「欠貝円」（図
4）などがあります。

正貝円は打刻を始めて間もない 1 円銀貨
の「貝」画です。普通円は貝画の前足に磨
損が生じています。現存品は殆どこのタイ
プなので普通円と呼ばれます。増正貝円は



図6 有輪

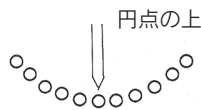


図7 無輪